

ダンス領域における 創造的な課題解決学習の再評価

—学習者相互の「関わり」に着目して—

松本 富子

I. はじめに

ダンスは仲間と関わって創造し、精一杯自己を投入して踊る中で、自己実現の満足が体験されるとともに、仲間と「共にある」喜びを味わうことができると考えられている。なかでも、学習過程で出現する学習者相互の「関わり」は、個人や集団を啓発し、一人では発揮できない表現の世界を実現させる推進力を持っていると同時に、子どもたちの共感的理解を可能にする。そのため、ダンス・表現運動学習では、子どもが精一杯に自己を表現できるような安心できる学習環境を保障することが不可欠である。そして、「関わり」場面が多く、なかでも子どもの親和的で受容的な集団雰囲気や学習課題の解決に寄与するような「関わり」が見られる学習が実現できれば、学習の成果が高まり、喜びの体験が得られるものとする（松本2004）。

そこで本研究では、学習過程で生起する学習者相互の「関わり」場面に着目して、量的質的な授業分析を行い、新たな角度からのデータを提供するとともに、創作ダンスの授業づくりならびに学習課題の解決に寄与するような「関わり」の在り方について考察する。

II. 方法

1. 対象：中学校1年生A組（女子17名）及びB組（女子15名）の計32名による全11時間の創作ダンス授業
2. 授業計画の主な特徴
 - ・前半は毎時間違った2～4人組での活動
 - ・後半はメンバーを固定したグループでの活動
 - ・ウォームアップの工夫
 - ・一言メッセージカードの活用
3. データ収集

実施されたダンス単元全授業ならびに生徒及び教師の行動を記録した。教師にマイクを装着して、1台のビデオカメラで教師の行動を、もう1台のビデオカメラで生徒の行動を集団標本法¹⁾によって記録撮影した。また、生徒による授業評価をとるために、毎時間の授業終了後、松本によるダンス授業を評価するアンケートを実施し、単元終了後には単元全体について問うアンケートを行った。

4. 分析の方法

体育授業の観察記録分析法²⁾を参考にして、ダンス・表現学習の授業分析に適応できるように

修正し、授業場面およびの生徒の学習行動の特徴を分析した。授業評価アンケートの結果については、統計的な処理を施した。

III. 結果と考察

1. 学習者による授業評価

生徒による毎時間の授業評価は、単元はじめから終わりにかけて有意に向上し、4つの次元別にも有意に向上していた。とくに、「かかわり」次元は最も評価が高く、他の3次元に対し有意に差が見られた。

2. 授業場面の時間量と授業評価との関係

よい授業は「運動学習場面」が十分に確保された授業であるとされている³⁾。授業場면을4分類した結果、「運動学習場面」は時間を経るごとに増加し、確保されていた。

授業場面の時間量と授業評価との相関関係をみると、「運動学習場面」との間にプラスの相関が、「学習指導場面」と「認知学習場面」との間にはマイナスの相関がみられ、「運動学習場面」が十分に保障されることが生徒の学習成果にプラスに作用することが確認された。

3. 学習課題の解決に寄与するような学習行動

運動学習場面において、学習者が学習課題に従事していたかをとらえる「学習従事」行動を分析した。その結果、単元を通して非従事行動はほとんど見られなかった。また、「直接的運動従事量」は、単元前半はほぼ一定で横ばいの値を示したが、単元後半の作品づくりの授業では時間を経る毎に上昇していた。

授業評価との相関関係をみると、「学習従事量」との間にプラスの相関が、「直接運動従事量」ならびに「認知的従事量」との間に、プラスの相関が認められた。

4. 単元前半と後半のグループ活動における関わり

5. ひとことメッセージの内容記述

6. 以上のことから、運動学習場面が十分に保障されるとともに、生徒がからだを動かしながら相互に関わり創造する学習行動と話し合い工夫する学習行動とが増加するような、学習者相互の関わりを生み出すことが大切であることや、その前提となるグループ活動における良好な「関わり」が重要な学習条件であることなどが示めされ、こうした授業づくりが学習成果を高め、共感的な喜びを導くことが示唆された。

<主な引用参考文献>

- 1) 松本富子 (2004) ダンス・表現運動学習における「関わり」の体験. 女子体育10: 32-33
- 2) 高橋健夫訳 (1988) シーデントップ体育の教授技術 大修館書店
- 3) 松本富子 (2003) ダンス (表現運動) の授業を評価する. 体育授業を観察評価する. 明和出版: 20-23 他